

木曾の宿場町を訪れて

渡部 美智子

1. はじめに

江戸時代に整備された中山道の宿場町は、木曾地域では11宿あった。そのうち、いくつかは、宿場町としての面影を残し、観光地であり続けている。2015年、久しぶりに木曾の町を訪れてみた。初めて訪れてから、かれこれ40年の月日が流れている。40年やそこらでは、変わらない町並みであった。私が訪れたのは、奈良井宿、妻籠宿、馬籠宿、木曾福島宿の4宿である。この中で、特に奈良井宿が、一番地元の人たちに守り続けられている印象を受け、その素朴さとそこに住む人たちの素朴なおもてなしにひかれた。2016年、再度訪れ、地元の経営者に少し話を聞くことができた。奈良井を訪れて感じたことをまとめてみたい。

2. 木曾の宿場町の概要

江戸時代に、西国と東国とを結ぶ重要な街道だった中山道は、大きな川を渡る必要がある東海道と違い、水の不便がないので、女性もたくさん通ったと言われている。その中で、木曾路と呼ばれるのは、江戸「日本橋」を起点として33番目の宿場である贄川宿から、43番目の宿場である馬籠宿までの11宿である。現在では、長野県塩尻市から、平成の大合併で岐阜県中津川市となった、島崎藤村の故郷の馬籠まで、ということになる。

贄川(33番目)、奈良井(34番目)、藪原(35番目)、宮ノ越(36番目)、福島(37番目)、上松(38番目)、須原(39番目)、野尻(40番目)、三留野(41番目)、妻籠(42番目)、馬籠(43番目)と続く宿場町は、現在、JRの中央本線の駅と多くが重なり、国道19号線が、並走している。この中で、観光地として人を集め、「木曾の宿場町」といえば思い浮かぶのは妻籠宿と馬籠宿であろうか。しかし少し残念なのは、この2宿は、JRの駅からは少し離れているため、南木曾駅か中津川駅からバスでのアクセスになる。

重要伝統的建造物群保存地区は、全国で112地区(2016年7月現在)¹指定されているが、そのうち、「宿場町」として登録されているのは8件で、木曾では妻籠宿と奈良井宿の2件である。

3. 奈良井宿

奈良井は、江戸からは34番目、木曾に入り2番目の宿場町である。江戸時代は、南に難所と言われた鳥居峠を控えるので、ふもとの奈良井宿に泊まる旅人が多く、「奈良井千軒」と言われ、にぎわっていたらしい。江戸後期～末期の民家を今も約180軒残して、往時の様子うかがい知ることができる。



写真① 2016年撮影



写真② 2016年撮影

昭和53年、国から「宿場町」として重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。妻籠宿の指定が昭和51年で、その2年後ということになる。街道に面した家々は、街道側から見えるところは、勝手に改装はできない。町並みを守るために、「売らない」「貸さない」「壊さない」という三原則が貫かれることになる。

2015年5月、奈良井宿を初めて訪れた。木曾の宿場町は初めてではなかったが、奈良井は初めてであった。松本を訪れた後、中央線で名古屋に出る途中、JRで簡単に訪れることができるので、寄り道をしたのである。宿場町は、JRの駅を降りてすぐに始まり、約1kmにわたって、保存された町並みが続く。歩いてみると、美しい町並みに感動させられる。初めてなのに、なぜか懐かしい気がする町であった。電柱と電線がなく、空が広く感じられる。諸外国のように地中に埋められているわけではなく、家々の裏側に電線があり、うまく見えないようになっている。

町には、飲食店、薬屋、土産物店、旅館、民宿などが軒を連ね、観光客がそぞろ歩いている。その中に、通りの北側に6か所の水場があるのが特徴的だ。「飲める水」と書いているところもあり、山からの水があふれている。町の人々の生活用水としてだけでなく、昔から旅人を癒す役目を果たしてきたものと思われる。



写真③ 2016年撮影



写真④ 2016年撮影

たくさんある店は、いわゆる企業が進出してのものではなく、本当に地元の人が、経営している小さなものばかりである。町の雰囲気とそぐわない、という店はなく、名産である塗りの櫛や漆器、雑貨店、そういった店で話を伺うと、保存地区を守りながら、旅人を受け入れる、

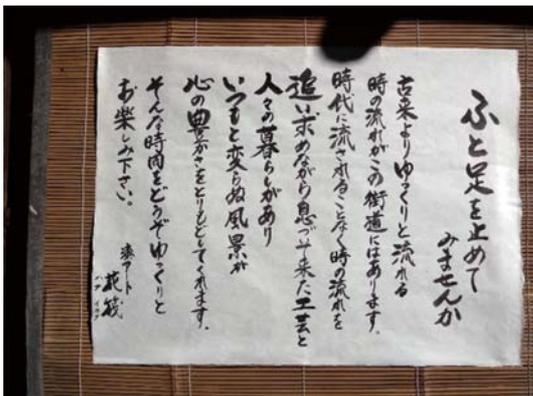
草の根的なホスピタリティを感じる。

駅前から、鳥居峠の手前にある鎮神社まで、町並みを見ながら歩いて1時間ほどしかかからない。実際、駅で出会った男性は、端まで歩いてすぐ帰ってきたら、予定の時間よりずいぶん早く、1本早い列車で帰る、と言っていた。でもいろいろな店に入って、地元の人たちと話したりしていると、何となく温かい気持ちになり、時間はいつの間にかたってしまう、そんな町である。

2016年9月、再度奈良井宿を訪れた。もう少し話を聞いてみたくなったからである。今回は、土曜日ということもあり、町を歩く観光客も多かった。以前訪れたことのある雑貨店で話を聞きたいと、思っ行って見たが、出入りする客が多く、なかなか話を聞けなかった。女主人は話し好きのようである。

・「漆アート花筏」

20年くらい前から始めたという雑貨店で、地元の漆工芸作家の作品、陶器、竹細工、隣の藪原宿の名産である、お六櫛、山サングのアクセサリなど、オーナーの女性が選りすぐって地元のものを中心に集めた、といういろいろなものが並んでいる。このお店を訪れたときに、店の入り口横の紙に書いている言葉（写真⑤）に目をとめ、店の中に飾っている山の花々（写真⑥）にオーナーの心遣いを感じた。最近、外国人の方も来られますか、と問うと、店にも外国人の旅行者が訪れることも多くなったとのことで、彼女は少しでも外国人と話ができるようにと、気が付いた英語のフレーズをノートに書き留めている、とのことであった。外国人、日本人に関わらず、たくさんの人と話したい、いう彼女の気持ちの表れであった。奈良井の町は、保存地区ということ、嫁いできた40年前と何も変わっていない、不便なこともあるが、いろいろな人、いろいろな国の人が訪れてくれるので、楽しい、と語っていた。



写真⑤ 2015年撮影



写真⑥ 2015年撮影

そして、駅前の観光案内所で、外国人が泊まっては「Very Good」と言って帰っていく、という外国人に人気の宿がある、と教えてもらい行って見た。

・「御宿 伊勢屋」

1km余りの宿場町の中ほどに、通りに面して建つ。創業は1818年、江戸時代は下問屋を勤めていた旅籠、というところで、現在も建物はそのまま保っていて、客室9室の小規模の宿泊施設である。奈良井では、積極的に外国人を受けている宿、ということ、経営者に話をき

いてみる事ができた。現在の経営者は、創業から5代目で、今の経営者から外国人を受け入れるようになったとのことである。外国人は前から受け入れてはいたが、ある旅行会社からの申し込みがきっかけで、5、6年前から一気に増えだした、ということである。成り行きで英語を勉強するようになった、とのことであるが、口コミサイト²では、英語の評価は高い。今もその旅行会社との付き合いが続き、そこからの送客やネットでの申し込みもあり、現在年間を通じて、全宿泊客の約4割が外国人ということである。

客室の9室は、通りに面している部屋と奥の離れがあり、特に通りに面している部屋は、純和風で、隣の部屋とはふすま1枚というところであり、トイレは共同であるが、歴史的な建物に宿泊できることと「おもてなし」が、不便さをカバーしているようである。

奈良井でも、外国人が増えているが、そこに住んでいる人たちが自然に無理なく受け入れているようである。日本人と普通に接するように気負いなく外国人に接している、と話を伺い、感じた。



写真⑦ 2016年撮影



写真⑧ 2015年撮影（内部）

4. 奈良井の外国人旅行客

JR 奈良井駅は、簡易委託駅となっていて、駅の乗車券販売は、塩尻市観光協会の職員が観光案内所、手荷物預かり所を兼ねて、行なっている。そして訪れる外国人の統計を約1年間とっていた。観光案内所は、駅と宿場町の中央あたりの2か所あるが、立ち寄りない外国人もいるので、もちろん全外国人の統計にはならないが、訪れる外国人の国籍を知ることができる。

表1 外国人旅行客数（2015年6月より2016年8月）1年2か月総数

アメリカ	431	スペイン	55	中国	34
オーストラリア	364	ドイツ	55	カナダ	33
台湾	176	スイス	53	メキシコ	19
シンガポール	126	タイ	53	韓国	11
フランス	118	マレーシア	48	その他アジア	67
イギリス	102	インドネシア	43	その他ヨーロッパ	137
オランダ	70	ニュージーランド	40	その他南米	18
香港	69	ベルギー	39	その他アフリカ	4
奈良井駅観光案内所調べ				合計	2165

これを見ると、アメリカ人、オーストラリア人が多く訪れていることがわかる。大阪でよく見かける、中国人や韓国人は、まだあまり訪れていないようである。特に韓国人は少なく、駅においている韓国語のパンフレットは全然減らないそうである。

外国人たちは、日本人よりも「歩く」コースを選ぶ人が多い、というのが木曾観光連盟の人の感想であった。馬籠宿と妻籠宿の間の馬籠峠、藪原宿と奈良井宿の間の鳥居峠が特に人気のものである。ただ、町並みを見るだけでなく、昔の人が歩いた道を歩く体験をしてみたい、という。奈良井は、鳥居峠のふもとにあたり、「歩く」人たちにとっては、JRの駅が両側にあるため、アクセスしやすいといえる。

2015年に訪れたときには、たまたま香港からのスクールツアーという10代の学生たちが前述の「伊勢屋」に滞在していた。「伊勢屋」の話によると、毎年1週間ほどをかけて木曾の宿場町を歩くツアーを実施していて、「伊勢屋」に投宿する、とのことであった。日本では小学生、中学生にあたる生徒たちが、このような旅行で日本に来て、日本や日本文化に接することで日本に興味を持ち、将来的にも日本に関わることになれば、とてもうれしいことであると思う。

また、奈良井宿にとって、JRの駅があることは、大きな利点と思われる。妻籠宿や馬籠宿は有名ではあるが、JRの駅からはバスでのアクセスになり、外国人にとっては利用しにくいかもしれない。奈良井駅に止まる列車の本数は限られているが、時間を合わせることであれば楽にアクセスできる。長野と名古屋を結ぶ中央線の途中なので、立ち寄りやすいともいえる。

実際、2016年9月に訪れたときに出会った、オーストラリアから来たという年配のカップルは、5週間かけて日本を旅行中で、3週間有効のジャパン・レールパスを持っていた。そういう人たちにとっては、奈良井は立ち寄りやすいところであろう。彼らはパスを持ち、北海道に行き、日本海側を南下し、長野から名古屋に行く途中で立ち寄り、古い町並みにとても喜んでいた。

奈良井宿からJRの線路をくぐれば、国道19号線にでることができる。そこには、木曾大橋があるが、道の駅と駐車場があるため、団体の観光客もバスを駐車できる。日本人の団体客も週末には見かける。外国人にも日本人にもアクセスしやすい観光地であるといえる。

5. おわりに

奈良井を訪れ、そこで生計を立てている人と話し、無理なく多様な人たちを受け入れる、草の根的なホスピタリティを感じた。長い間、旅に関わる仕事を続けていて、私は、国内外の観光地の栄枯盛衰を見てきた。「ブーム」という名のもとに、たくさんの観光客を集めては、「ブーム」が過ぎ去ると、観光客が激減し、「ブーム」前の状態には戻らなくなってしまう例は少なくない。

しかし、奈良井は、「ブーム」とは関係なく、脈々と受け継がれてきた町並みが、自然な流れで静かに観光客を受け入れている。これからも身の丈にあった数の観光客を受け入れていくだろうし、そう願いたい。「ブーム」に流されない、地元の人たちが守り続ける小さな観光地が日本にはまだまだあることを誇りに思い、いつまでも変わらないでいて欲しいと願うばかりである。

注

- 1) 文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp/bunkacho/> 2016年10月15日最終確認
- 2) トリップアドバイザー https://www.tripadvisor.com.ph/Hotel_Review-g1021320-d1115386-Reviews-Iseya-Shiojiri_Nagano_Prefecture_Chubu.html 2016年10月15日閲覧

参考資料

文化庁ホームページ

木曾観光連盟発行「中山道木曾路 小さな旅」

木曾観光連盟発行「信州木曾路 中山道を歩く」

奈良井宿観光協会発行「中山道 奈良井宿」